



関ヶ原軍記

二編 九七

九八

遠13  
2207  
29





門遠13  
冊2207  
卷29

池清

関ヶ原軍記武篇卷之廿七

目錄

- 一 鴻新十郎常と震つて素山村たむら
- 一 并園東勢敗走の事
- 一 鴻左近 系極勢と戦ふ事
- 一 并新十郎 系極勢と破つる

和漢

貸本所

東京牛込細工町

誠光堂

池田屋清吉

凡士濃工高と云夫の職分家業を因て括用の異物と云ふ  
 今日と管む夏世夏一級之然らば世写本の巻中小解が自家  
 可き種々の書入又ハ秋之愛来りき本偶人感見書  
 男女の孩様と画き君臣父子の中や一画と云ふ合事  
 同く多し是書ハ必竟一時の興り系つての戲道ゆえ併  
 其職分此道具ハ疵付のハ解と云り著述拙く筆業者の誤り  
 可きも只言語と云く其遇ちと各免卷中の戲画樂書等ハ  
 池田屋常以是と歎然然不真源一因て系代りて諸君子所  
 磨石山人識



夏堂なつどうと合戦あひびきの事

池清



岡ヶ原軍記武編卷之廿七

鴻とら新あら十郎じゅうらう曾そうと震ふるつて素山すくやま村むら執とらおと戦いくさの事

并素山ならひすくやま村むら執とらおと戦いくさの事

曰いはく石田いしだ活部かつぶ少輔せうぶが先陣せんじん島しま左ひだり近ぢか会あひ越こえりて夏なつ子こ川がわを越こへ  
将しょう新あら十郎じゅうらうと先せん子こ平へいはらへり



後人のそとくともありも構  
日比谷舟次費平御くべし  
と下知して極死種とををて  
お出さるこのせりつごんご  
のうち村越素山松下等うけ  
合せよく執るひしけ遊く  
らう次子系極丹後守玄士城  
進むこの執るひしけあり

一が勝の軍勢勝るるり  
向ふりのるはせり度堂高虎  
後り合て手荒くお執る  
このせり勝友との徳方此戦  
うひるるるり名ひ父子  
おりるるるる近き井作と戦  
らふ又新十席の度堂との合戦  
急してそのをさしたる人



千秀で度堂玄蕃と討返り  
玄蕃乃嫡子帯刀の爲に新十  
廓に討入りしこの時新十廓  
が軍兵ども敗走す碓氷の  
小幡を討取られし志はしく  
乞と叱して休息せしめて徳  
旨とも致しひらき申合ふ中納  
言秀林の大軍大谷刑部少輔

かそちへ 一うきり 次義れ  
義ありて世に申なり  
碓氷を固く新十廓を  
父子との千長刀に達人  
よして実ふ不忠敵のふ子  
ありて是のち中納言のり  
もろち義をも只書籍の後  
形しんとし人毛あれど



今く友く何く天徳と  
不思議の達人として定法  
論よりこれ元祖あり今  
此世の中も古刀の是これ  
論が流義なり何のとも  
養術より自然妙の  
中ありこのゆへに兵書  
よき書と習ふべき

版を吟み着れど  
沖那形くはるゆへに  
ゆらゆらありこの  
ゆへに知る時き一切の法  
養也急用不急用といふ  
る形をづるなり行なり  
名人といふもつゆ  
せんはるまはる法養



修刊のりの中出版を吟め  
著のりしり不調法  
人も著此利しる事出版  
計焼のりしり炎のりし  
りても撰りりりその早ま  
仕言のりしり人りりり  
能くそりりみ捌く二四也  
此小思乃時よりらん

毎日武度之夏完一生涯意  
りりぬりりり自然と名  
人し制り期のりりりり  
りりりりりり一日お二版  
手にりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりり  
りりりりりりりりりりり



武藏をいけ下ろくるまぶ大名  
人と判るべし去れを早  
人ともも武藏の名人あり  
ふあゝん吉見憲法を小太  
刀此名人ありまゝの深りのも  
吉園ぞありといひ深りいづ  
この人石匠緋屋のいづ  
きあり緋屋のりともあり

あゝいぬりまゝのまゝと  
射と名人ありぬりけ  
飛躍をもおゝあまゝより  
白と上手にぬり或時街  
及も侍心の喧嘩をよる  
中一分入り被作ぬり  
くくくとち刀とまゝあり  
て終身分よりけ時より



銀粥と称するは及理と云ふ  
事と知り一人に寸此小極是  
とて古是流と唱く骨子  
大勢有りて古今名人の号  
或るより或時  
林表と云角力の時多梳  
のふ力同人の老老造恨  
名ひ無神子糧藉と仕裁て

喧嘩子及ぶ有小を刀有りて  
切詰ぶふ力三人同ん拾七人  
切教していりお働るま  
お手るあけ色ばる候くしり  
走り去るんとしりら時思ひ  
返し此竹と急物の裾をり  
一故是と多んとすらすは  
錢と仕向らんり裾く



中ぎんを申す仕向の事  
りるからん一ヶ松の事も  
何れも只藤原の如くして自然  
と妙の事ありあり松友  
近あるび新十郎父子  
の人と長刀の柄みくも  
松友の名人多く力量も  
徳人千孫とてとや

去程一慶長六年九月十日  
良朝あき常つねも晴はる海うみ千浮うき田でが  
軍かみ乞ご福ふく崎さきと陰かげ合あひも  
崎友進さきとも石田三成いしださんせい向むかり  
今日此戦けふこのたたかひひるあ  
叶かなはるる千國東  
物ものも安やす危あやも一戦いちせんあり  
それか一いちの事ことなり



渡りて合戦を交し徳手も  
陣を踏ぐつきの桑石田度  
河津小西おとをんで  
徳川度と戦ひと決し  
りしに近き手勢六  
百余人勢とも都合子六  
百余人決志し人度子川と渡  
り戦へく志度千軍り過り勢

烈風れどく真馬りありく  
打出くらの天晴る度乃徳也  
関東の軍勢千と有し  
寺々徳のらち桑山併せ  
村越多摩松下在徳の尉三人  
は勢合せて二千余人とあり  
とて種物を打ちけく関の  
声をとく新十郎



の若武者此上常獲ありき  
今日もと宿願と是恨なき士卒  
下知して日頃の武意なきこの  
時ありと軍令なきをいふ東野と  
き人も少くば討たんと井に  
清友弟つ下知して心は誰  
人の情なきもあらずも弱く是  
程百人銃炮をとるべく敵に

あせまくなきを先高きなり  
新十郎の馬系威し此程の  
千馬ぬり此馬を冠り馬怒毛  
城引おして白毛の馬千りち  
のり白柄の長刀なき程と追  
名のへる城飛して強りづる先  
素山作野守が徳へ千銃射す  
さだるものをも飛れ吹返し



城長刀千ヶけたるを小千城  
うまらるる前後車切り  
蕪切り小まらるる車切り  
人ま山乃てく申すおのそを  
むけべま指をるたゆ急よ西  
志をく<sup>やう</sup>勢<sup>し</sup>一<sup>ら</sup>ら<sup>ら</sup>ち<sup>り</sup>  
野十郎が総中八百余人輕波の  
急城く<sup>ち</sup>押<sup>を</sup>り<sup>り</sup>素山が

軍をた繞全小舟を志性た性よ  
級軍一して次の備一<sup>ら</sup>部<sup>ら</sup>る  
この次々村城松平が備一あり  
一が大小千發ぶ素山が敷軍  
此士率よくこなぬ久され大ひく  
うろく<sup>あ</sup>相<sup>い</sup>保<sup>と</sup>車級軍れり  
ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>申<sup>す</sup>勢<sup>を</sup>合<sup>ま</sup>す<sup>べ</sup>ま<sup>ま</sup>侍  
もちうく<sup>く</sup>通<sup>る</sup>よ<sup>め</sup>つ<sup>を</sup>く<sup>く</sup>と<sup>次</sup>



新十郎大言揚く初めの軍  
勝利あり年武者も追散  
大將と見るべしちあんと下知  
其子のせり二人乃大將追  
らん是是も形く級軍せり

新十郎大言揚く初めの軍  
勝利あり年武者も追散  
大將と見るべしちあんと下知  
其子のせり二人乃大將追  
らん是是も形く級軍せり

友堂新十郎と合戦の事

既手鴻新十郎を戦ふ孫よ成  
しと母の父の友近を二乃目  
城りちをとりけてし急攻あげ  
系極丹後守り徳下銃砲戦  
ちち極多高知士率く下知を  
傳へ同く銃砲を打るると



と大鶴勢の筒先まきびく  
して是程苦もむくくく  
急より足見滞り一灰近とる武  
者も揃へく一葉切りお欠破れ  
と下知して志先よりむくみ  
長刀の機多し目おさく切ら若  
きあも滞りむと難倒と左近  
の一世一代の御身さる部のりくま

ありと勵むゆくむくありの一人  
も好くあぐみ果るおれそ  
あれ嫡子新十席の村銀 幸山  
等と遊るひ八百余人 越来  
とめ銃炮を揃へく一葉極言知  
が藤本より横合よりお入より  
丹後守がさるの中大ひり終が  
立く幸さる二の目横矢込入



らんでい大まき小難儀あらふ小増  
てや鴟父子が常獲して横矢と  
二和子りみまらん何うの取て  
うめうべま系極が軍勢の立是  
毛那く敗走をけ良鴟が軍兵共  
い逃ると追わく多く款乞切  
依もより度堂も虎をんをんて  
このりこさやうとく鴟が軍兵

追がうべ流籠本く近うらま  
有りいらの時をう部をまや  
系手と碎まてお教の度  
時長ありと或千八百余人をえん  
月子値の碎さぬを留ら此軍  
法して銃砲銃或百挺打出  
より鴟友を軍兵に  
一めん千とく子極く一牧楠



城よりうごき 足櫃と鑓なり  
を打つて 双方度しく  
おまらるる極多修歴及此  
うひも却やみんとおび  
— 去れば惣合せし 未だ鑓も  
あつて 双方全部の良なるんば  
鳥銃炮を合して 申時をうり  
うごき ころころのせり 鳴新十郎

是父友をが徳へり 乗舟くわ  
よや父くも 孝くもへ行くと  
石田屋の二乃目 出まきや今  
日平をや 午に刻し 近舟はと  
まて 石田屋の軍勢来り ざら  
いふるも 子細も 一人  
ふ成り けり 心たね  
いそ だ 切 接 けて 石 田 どの



脚事とあり一をん<sup>ご</sup>の<sup>て</sup>歌<sup>い</sup>を  
度<sup>じ</sup>堂<sup>じ</sup>斗<sup>り</sup>りとお名<sup>く</sup>く<sup>り</sup>は<sup>次</sup>次<sup>の</sup>  
冥<sup>ま</sup>東<sup>とう</sup>の<sup>心</sup>籠<sup>かご</sup>布<sup>ふ</sup>へ<sup>ま</sup>ち<sup>く</sup>り<sup>く</sup>せ  
次<sup>じ</sup>は<sup>を</sup>の<sup>り</sup>度<sup>じ</sup>堂<sup>じ</sup>が<sup>値</sup>へ<sup>ま</sup>を<sup>集</sup>  
交<sup>ま</sup>交<sup>ま</sup>お<sup>御</sup>事<sup>ご</sup>や<sup>ま</sup>あ<sup>り</sup>と<sup>い</sup>ひ  
友<sup>とも</sup>を<sup>こ</sup>れ<sup>を</sup>を<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>あ<sup>ら</sup>ま<sup>じ</sup>は<sup>梳</sup>  
あ<sup>ら</sup>ま<sup>じ</sup>や<sup>秋</sup>子<sup>こ</sup>と<sup>い</sup>ひ  
あ<sup>ら</sup>ま<sup>じ</sup>軍<sup>ぐん</sup>意<sup>い</sup>も<sup>あ</sup>つ<sup>く</sup>大<sup>た</sup>勇<sup>ゆう</sup>

別<sup>べ</sup>乃<sup>の</sup>の<sup>あ</sup>り<sup>致</sup>の<sup>の</sup>務<sup>む</sup>負<sup>ひ</sup>を<sup>ま</sup>  
汝<sup>に</sup>ぢ<sup>が</sup>や<sup>如</sup>く<sup>ま</sup>人<sup>ひと</sup>石<sup>いし</sup>田<sup>でん</sup>の<sup>の</sup>  
武<sup>ぶ</sup>の<sup>目</sup>と<sup>そ</sup>紀<sup>き</sup>も<sup>い</sup>り<sup>く</sup>を<sup>紀</sup>紀<sup>き</sup>  
して<sup>く</sup>が<sup>む</sup>り<sup>り</sup>れ<sup>を</sup>て<sup>ま</sup>る  
ま<sup>を</sup>を<sup>養</sup>え<sup>ぬ</sup>部<sup>ぶ</sup>く<sup>運</sup>の<sup>の</sup>  
く<sup>ら</sup>大<sup>た</sup>乃<sup>の</sup>を<sup>竹</sup>子<sup>し</sup>も<sup>新</sup>の<sup>の</sup>ごと  
く<sup>あ</sup>り<sup>よ</sup>り<sup>ね</sup>ま<sup>よ</sup>人<sup>ひと</sup>千<sup>ち</sup>所<sup>しよ</sup>を  
は<sup>父</sup>子<sup>し</sup>れ<sup>功</sup>名<sup>めい</sup>も<sup>あ</sup>の<sup>池</sup>と<sup>あ</sup>る



ふしそれとも天命ありき  
好し抑もせん然今あんぢと  
誰うの寔早今生れ別きある  
を―お揃へく我十師能く  
孰うてうちとあせりお  
承る事の時に本必討馬へ攻めし  
且れ今を度多人三載どの  
いささ誠助けやさあつりと親子

ニツよ人殺を引分け屋ごとを  
と度堂が先陣あ―おくくうら  
そいさそひの潜の落るが如く  
海が軍を考の孫經彼を揚て  
押し破らん―と度堂  
高虎下知―と人の子  
うちまんと叫日りらん―孫堂  
仁右衛門同くそ―同く我七



帝 後部作之集 兵倉友左衛門  
つ等と始りてて 飛虎の志  
ども立きしりくおをくく  
磯左近きこのとらめを切替て  
主人石田の籠さるちとん中  
おりあふり 騎る武者切替て  
兵陣よりこの軍中と切替  
向あの方つくとぬけて子路

城見れを雨く 旨くして討色感ひ  
い初手取りて 款手切立を討勢  
さきく ちの目づらふぬ百騎  
さかざんばこの軍名 城よりあて  
家康公の 伊籠本を目標  
るを本陣よりたり

池清

関ヶ原軍記二篇巻の廿七終 池清



池清

関ヶ原軍記武編卷之廿八

目録

一 鴻左近 井伴 本多氏勢と延援  
事

并 鴻新十郎 玄蕃 討く 其子  
帯刀之討く事

一 大谷吉隆 諸陣の招子 湯浅入助



入助いすけの向むかの事こと  
并な吉隆きちろう 金かね又またが愛あい包ほうと情じやうの更さら

池清

同どうヶ原がはら軍ぐん記き武ぶ編へん卷くわん之の廿に八はち

鴻わう左さ近きん 井い仔ざ布ふ多たの勢せいと強ぢやう接けつん

并な鴻わう新しん十じゆ席せき更さら及及び堂どう云い葛が葛が城じやう  
討うく其その子こ常じやう刀たうと討うく事こと

去き程ぢやう小せう鴻わう左さ近きんを常じやうと震ぢん門もんて  
及及び堂どう云い虎この陣ぢん中ちゆうと強ぢやう接けつん



家康公の内務本と目掛く馬  
城をせらるにこのせり井仔虫政の  
兼て言しこれ戦ひとてさうさ  
うけ給く御籠本と大なる  
名もが存懐合よりいさうけ  
うさうめく園のさあはる  
まのりりい本多忠勝武千余  
騎を誘ふたをが勢と追えぬ

より左をさうを尻く

目掛く記 内務の所

威光うれしうに志良此  
長下と持する存部の時麻よ  
りてめく物めのりまのり行  
とて秋を人衣田屋の手際小  
及ぶ存記や志うれた出とさ  
と切振でやの量へさうでく



手並にやどと足並にささくこと  
軍兵又百餘人強き丸を壁めて  
左をさす先よりさす切換ん  
と長刀と水車よりさして壁横  
り難なるこの橋が向あよとる  
りの一人とて手と負ぬ者も  
ありりりり左近をさす水りこの  
新と切換んと南水よりお拂ひ

車物より強より働くとつくた  
井伴本多も橋と見たり車  
あれば遊兵迎めて手佐の務負  
とせんとのちるり流石にお  
手の井伴本多也仍く橋の  
軍名も欠隔てられ漸  
百騎をうりりさるつてゐるのと  
り集むらと左を二面と橋



く 雅<sup>え</sup>ち<sup>く</sup>く<sup>る</sup>の 国<sup>くに</sup>と<sup>と</sup>切<sup>き</sup>ぬ<sup>け</sup>  
く<sup>り</sup>ら<sup>ら</sup>の 実<sup>み</sup>も<sup>も</sup>無<sup>な</sup>双<sup>ふた</sup>乃<sup>の</sup>膏<sup>こう</sup>士<sup>し</sup>あり  
破<sup>やぶ</sup>い<sup>い</sup>つ<sup>つ</sup>放<sup>はな</sup>良<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>も<sup>も</sup>井<sup>い</sup>作<sup>さく</sup>  
本<sup>ほん</sup>多<sup>た</sup>が<sup>が</sup>国<sup>くに</sup>と<sup>と</sup>る<sup>る</sup>物<sup>もの</sup>と<sup>と</sup>切<sup>き</sup>ぬ<sup>け</sup>  
く<sup>く</sup>の<sup>の</sup>放<sup>はな</sup>る<sup>る</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>左<sup>ひだり</sup>近<sup>ちか</sup>き<sup>き</sup>是<sup>こゝ</sup>  
を<sup>を</sup>討<sup>う</sup>破<sup>やぶ</sup>り<sup>り</sup>跡<sup>あと</sup>を<sup>を</sup>軍<sup>いくさ</sup>を<sup>を</sup>ど<sup>の</sup>の<sup>の</sup>戦<sup>いくさ</sup>  
月<sup>つき</sup>年<sup>ねん</sup>して<sup>して</sup>実<sup>み</sup>々<sup>々</sup>東<sup>あづま</sup>海<sup>うみ</sup>及<sup>およ</sup>ぶ<sup>ぶ</sup>より<sup>より</sup>少<sup>すく</sup>  
く<sup>く</sup>物<sup>もの</sup>を<sup>を</sup>れ<sup>れ</sup>つ<sup>つ</sup>く<sup>く</sup>く<sup>く</sup>軍<sup>いくさ</sup>を<sup>を</sup>戦<sup>いくさ</sup>也<sup>なり</sup>

石<sup>いし</sup>田<sup>た</sup>が<sup>が</sup>陣<sup>じん</sup>と<sup>と</sup>竅<sup>くわう</sup>の<sup>の</sup>法<sup>はふ</sup>守<sup>しゆ</sup>り<sup>り</sup>着<sup>ちやく</sup>得<sup>とく</sup>  
して<sup>して</sup> 内<sup>うち</sup>府<sup>ふ</sup>公<sup>こう</sup>尺<sup>せき</sup>出<sup>で</sup>籠<sup>かご</sup>本<sup>ほん</sup>  
城<sup>じやう</sup>討<sup>う</sup>んと<sup>と</sup>西<sup>せい</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>より<sup>より</sup>下<sup>くだ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>ち<sup>ち</sup>  
堀<sup>ほり</sup>あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>ん<sup>ん</sup>で<sup>で</sup>糧<sup>りやう</sup>を<sup>を</sup>取<sup>と</sup>つ<sup>つ</sup>ら<sup>ら</sup>ひ  
く<sup>く</sup>休<sup>きゆう</sup>息<sup>しやく</sup>は<sup>は</sup>鳩<sup>とむ</sup>友<sup>とも</sup>川<sup>がわ</sup>が<sup>が</sup>武<sup>ぶ</sup>骨<sup>こつ</sup>の<sup>の</sup>実<sup>み</sup>お  
お<sup>お</sup>と<sup>と</sup>海<sup>うみ</sup>く<sup>く</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>り<sup>り</sup>る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>せ<sup>せ</sup>り  
崎<sup>さき</sup>新<sup>しん</sup>十<sup>じゆ</sup>席<sup>せき</sup>の<sup>の</sup>兵<sup>へい</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>小<sup>せう</sup>糞<sup>ふ</sup>る<sup>る</sup>に<sup>に</sup>  
父<sup>ちち</sup>と<sup>と</sup>名<sup>な</sup>城<sup>じやう</sup>分<sup>ぶん</sup>く<sup>く</sup>る<sup>る</sup>衣<sup>い</sup>漸<sup>ぜん</sup>く<sup>く</sup>二<sup>に</sup>百<sup>ひやく</sup>



余人於り井口清友集つゝ下知  
して高虎のそと人波目を馬次  
入く我らんと是輕の次と強  
を引提多待りけりなり友堂の  
をにおふの敵の色強能くさとり  
ありおさふゆも必死と覚悟  
しる敵くれと志をくく  
ゆる豫  
まらうちりゆり本多忠勝の勝

友をと追拂つゝ勝園城あげ  
勝新十郎が後ろより大山の  
岩よりがぶくくし押身より  
勝十郎これを見く今いこま  
ちで取りめんく向ふ敵をん  
を友堂よ向のく討死せしむと  
馬より飛下りく武百余人皆  
あかりまきりけりつゝと小楠



よみくく 膝を入るる 度堂を先陳  
中軍一手に放て 鎧掛へお致す  
仍よりい 本多勢が切立る 今い  
ちや 新十郎が去るもさんぐ  
！ 放くうちドおまら申し  
新十郎の 兜をえきて 鎧の  
茶掛を 打ちぎり 大童に 放て  
矢！ 物料の 子長刀と 水車よ

とて 討馬の 國乃 怪人 渡辺 堂  
鴻左近 友之が 將新十郎と 討矢  
て 巻ん 子やうと 名乗あぶ  
寄り 来る 人を 羅依せら 存味方  
此軍も 去るも 猶 縁もらと ころあふ  
大將 高虎 大おん 子比 真時 時  
この 老ど ころ 丸 赤白 身く 出  
る 総討 子せん ころ や 丈 逆も



及ぶやうに 飛うる新十席 戦  
生捕 下知する時 夜堂  
玄蕃の 友堂 衆に 於て 衆を  
討て 先手 此軍 討て 法雨の 戦  
うひも 年来 剣く 常割の 兵  
あり 一が ころ ころ ころ 馬 戦  
常 敵 一 堀り 上 手 踊り ころ 手  
戦 新 十 席 の 長 刀 一 手 人 心

是らに 玄蕃 自余 法雨 の ころ  
奪りて 大 玄 乃 力士 あり 新  
十 席 の 長 刀 の 柄 手 無 手 取 討  
引 組 ぶり 玄蕃 の 四 十 丈 此 古 玄  
新 十 席 の 十九 丈 の 長 者 討り  
双 方 討 ち 骨 士 三 手 討り  
く 組 合 する ぶ つ ころ 是 下 手  
玄蕃 ころ ころ 換 して ころ 手 伏



も新十席の地なりと幸ふそり  
て首をとり馬の境手く舟く  
志りぞうんまら時玄蕃が悴  
帯刀の々年十六才なりしが  
父が美部を足くると幸ふ  
秋風のうらたありる幸ふ  
返して孫負せしむる日々にぞ  
新十席の振うりの急度見えて

お笑ひの秋と同どさるその  
父子とのふ芸泉の業肉させん  
と又馬より飛降り長刀と構へ  
て侍をとりまき度堂新七  
席のつめぐ玄蕃との不恥之  
しがこの時大いふ歌息して  
永日頃業と幸ふそひの武及  
れせり合あり今より誰人と



うりつゝきふをよいぞく一節  
らひ軍して見まへまなりと  
同ドくはとらつゝこそ来り  
るよして見れを若年此帯刀  
錢を引志まひくもありさ  
申とまらちりふんも新七席  
中に渠が為らま父の仇あり  
志くゝばこの若老も手がく

ますすべまらりと新七席  
過の身声と截多むざりつけ  
それたゝと透ありさの若老  
の新十席あれ若運のつぎ  
ぬのめ那さの若七席が截  
那テとぬありのまらよ働  
うき心西側あり先塚ある  
彼奴討く控んと振うる



とてふつと父のりつては差へよと  
一急此種さたを寔せんとし  
痛手ありとては流石を  
十席種の柄を折くまじみ  
来々此帯刀のち刀と扱へる向  
さぬり切身より一に時が  
たり此後此切居を新十席の  
とれよとてつと心ぬより

孫を打平切身よりあ  
あむ帯刀の寔知はよ  
壹種七席種より陰の柄  
寔出して南より其時新十席  
ありとてつとつと帯刀の  
せんで物板よりち刀と刺つ  
如き押成せて終り首と  
居せしはつと比類を此



身なりこれ千とく新十郎  
が跡気有る衣性衣性、級軍  
まこの時及堂家の惣勢掃軍  
城揚く、量るる気城をありり

大長吉陸徳軍此客子と湯沙  
又助、何ある  
兼吉陸、重るるが愛心城懐る事

曰く大長刑部少輔、智勇兼備  
此良將、徳方執る、此掃軍、城  
守、金吾、始り、朽木、根坂、秋月、木  
子の徳將の伎、配り、と考へ、扱る  
逆心、お遠る、口惜くも秀秋  
城殺さる、今後悔、あり、されば  
実勢の執る、ひとと、是、と云ふ  
たむ、あ、して、鉄炮、城、配り、あり



搦へありけし藤崎子大學院二男  
木下山城守の江戸  
中納言及の押へて石原時  
のむらひあり候へき辨なり  
叔又園東方糧糧のお島三度  
今更日の軍乞二万又子余入松尾  
山より一時千大首が値へり押  
名は時朽木 根坂 秋月と

お修手裏切して大首を打て  
是ら吉隆と名なく是悟あは  
乞士越をめて強を合せ今更日  
上秋月朽木根坂お越討伏せる  
更更度なりとありとありども  
冥東の大軍籠ひ集り江方  
八面より五圍む吉隆士卒  
願やしていざみ殺るこのせら



戸田武蔵守 平塚周情守とく  
討死す

云々書く曰く凡そ眼力天眼通  
心眼通 肉眼通乃三ツあり肉  
眼を頼むやうに心とあり左  
も右も事なりんを人君と  
して眼力やど有難きなる  
とくども深く頼むべき

あゝ眼眼月大谷吉隆元年  
久我盲目あり人ありとく  
大文智謀異術有りて若く  
よ自由の事ありんを  
了眼通乃古代ありとく  
せんがく後代を知り天地の  
あつよふるに物と悉く  
極まるんを神の明とあり



らめ神仏千遍下して辱は  
佛といふも去る去る現在未  
来乃三世法見深く人法を  
くはといふれ別ち天眼  
遍有り心眼を肉の眼あり  
育つる人のあがくよりある  
ひき人乃声なきも生人法  
知り又ち天晴雲も皆これ

心眼通之凡そ常々此眼力の  
肉眼にて大い迷ひ此程  
よて唯黑白と見分けざる人  
花蟹ののりちを足る申す  
悪業羅業を皆是眼力に  
おろる大舌舌陰も盲目より  
といふ言ひくその掃真を知り  
固のく多法ましく人教の



多かどとさすにききしを  
遠りば石名原乃良將あり  
衣を人召り肉體をど調  
法華の物語をきりて慈悲教と  
りやよあ〜凡人乃樂し  
もけ肉子有といふに精なる  
の説あり〜ありては廣大の  
罪業あり凡そ人間を百八

耗<sup>たう</sup>の速<sup>すみ</sup>ひあり是<sup>こゝ</sup>一<sup>いち</sup>惡業<sup>あくごふ</sup>此  
報<sup>う</sup>の百八<sup>ひやくはち</sup>は感<sup>かん</sup>十分<sup>じふぶん</sup>感<sup>かん</sup>八百  
り感<sup>かん</sup>心<sup>しん</sup>八十<sup>はちじゅう</sup>と説<sup>とく</sup>あり目<sup>め</sup>み見る  
るゆ<sup>ゆ</sup>に感<sup>かん</sup>八十<sup>はちじゅう</sup>あり〜心の部  
を〜成<sup>なり</sup>る惡業<sup>あくごふ</sup>隨<sup>したが</sup>一<sup>いち</sup>乃<sup>なり</sup>根<sup>ね</sup>え之<sup>これ</sup>  
肉<sup>にく</sup>と見るめを或<sup>ある</sup>ひら〜つ〜  
〜ま<sup>ま</sup>是<sup>こゝ</sup>も好<sup>この</sup>む〜見る速<sup>すみ</sup>ひ  
よ報<sup>う</sup>り草木<sup>そうぼく</sup>の在<sup>あ</sup>るひら



衣類の色ごとくく見る惑  
ひりて身代物けとる白髪  
をさそとけりさうして自由地  
ゆつと斗り之は見え八十足  
あり百八耗惚乃迷ひたうち  
八十と用ちらばそれ気肉眼  
のまゝと見らるりこゝろ  
子つて人悪業死りて悟身

悲うらみ 悲あはれ 悲あはれ  
悲あはれ 悲あはれ 悲あはれ  
肉眼の迷ひるる見るより  
うまらる車能くは振り  
いり時きん眼通決明おし  
くそのふと肉眼の迷ひお  
惑あはれ 惑あはれ 惑あはれ



度きちうりけ存平ころろ  
定まりころざら時を船く見らさ  
へ又いひくころころひと起る  
随分心成たころあちて天  
眼を秋物ころしてそころそ  
肉服をのりころ見らと見ら  
別ち神意正連の眼をいひ  
度大長が目けつぐれころ度

い世人福むころころ  
希有のららね

初く長又年九月十日朝  
雲晴海り徳方たころひと交  
あらせり  
家康云より  
御下知ころて大管刑部少輔が  
ころあて切切あまべころむころ  
明り実やころあてびれ教ころ



物玉有は根軸あれは根より  
もへまを更なる所乃の形もては部  
の如しこれか

東照宮乃御服刀を能く  
ゆりたるひぬら手扱あり左  
を去隆きいし良将と志る  
をく部く大旨刑部少輔は今  
日此教ひ十が丸の級軍あぬ

をくは是悟の若るれば  
へ此旨と中觸ら手嫡子大旨  
次胃木下山撤る乃真人を石  
系時とよみのりるるに三子余騎  
以て後

秀忠公

御上洛城さくきと陣を  
張せその所を寔竟乃英会  
百余人を志るるく又総



備へり亦老下河辺惣志左馬の  
牧野軍舟曰く七左馬の古川  
左所を築池澤見事平子清  
左馬の修久留劫右馬の赤也  
これ二百余騎とる此前後  
彼へさせ最良と白と深分此  
さし物全此御幣の馬市に  
押立させ大旨吉原を床机よ

橋を撤りり今年又十六歳此  
良將之し安らり出さる  
自分の病所を練費の小袖二  
つ急ぐ上る鏡車急ぐし急ぐ  
よそ村懐二つ二つぬい漬芸地乃  
車番車番毛の三枚兜白危そ  
上城包そお建物全の日輪之  
け兜とばりりよ急り銀



後の御南金少礼の佩とて  
魚の紋とてより御も其威有て  
糧とて通たれの名物之介とて  
よの北西随一の湯漬め物中武勇  
も備とて智徳の英士之け人  
を例とて是をよりの事とておる  
おん為持とてその実部とてきり  
とら事あるを一人の物とておるぬ

湯漬も今報より此致の品のと  
尺とて吉陸の中りり  
内府公とて極死の節より西籠中  
城九段とて徳とて孫山とて籠とて  
孫とて又実ヶ所とてその名とて籠  
を却て衣の方の山内討とて  
系極地理とて又みるる吾輩  
とて活志とて吾輩酒堂河波とて



又たり代方の金太法市 生駒潜  
破す 堀尾信流もあつていし荒尾村  
よの南<sup>えん</sup>文<sup>ぶん</sup>山の<sup>て</sup>手<sup>あて</sup>苗<sup>なへ</sup>と見へて法  
神池田あり前も夜堂 細川  
黒田井作 本多末之福崎西刻  
の今浮田と戦ひと交<sup>まじ</sup>りて中  
味方の石田が藤先<sup>ふせん</sup>只今出ると  
いふ大谷うあづま叔も雲東方の

後<sup>のち</sup>も<sup>も</sup>海<sup>うみ</sup>軍<sup>ぐん</sup>も<sup>も</sup>足<sup>あし</sup>一<sup>いつ</sup>あり<sup>あり</sup>池<sup>いけ</sup>ら<sup>ら</sup>よ  
味方<sup>あじ</sup>は<sup>は</sup>後<sup>のち</sup>一<sup>いつ</sup>も<sup>も</sup>心<sup>こころ</sup>は<sup>は</sup>ね<sup>ね</sup>只<sup>ただ</sup>は<sup>は</sup>方<sup>かた</sup>を  
き<sup>き</sup>騎<sup>かき</sup>の<sup>の</sup>如<sup>ごと</sup>く<sup>く</sup>之<sup>の</sup>心<sup>こころ</sup>定<sup>さだ</sup>め<sup>め</sup>候<sup>まほし</sup>ま<sup>ま</sup>は  
ま<sup>ま</sup>あり<sup>あり</sup>叔<sup>おじ</sup>又<sup>また</sup>中<sup>ちゆう</sup>五<sup>ご</sup>勢<sup>せい</sup>は<sup>は</sup>藤<sup>ふじ</sup>先<sup>せん</sup>也<sup>なり</sup>候<sup>まほし</sup>ま<sup>ま</sup>  
又<sup>また</sup>一<sup>いつ</sup>も<sup>も</sup>金<sup>かね</sup>吾<sup>われ</sup>の<sup>の</sup>後<sup>のち</sup>一<sup>いつ</sup>も<sup>も</sup>  
あ<sup>あ</sup>一<sup>いつ</sup>も<sup>も</sup>あ<sup>あ</sup>よ<sup>よ</sup>又<sup>また</sup>助<sup>すけ</sup>中<sup>ちゆう</sup>の<sup>の</sup>去<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>は  
今<sup>いま</sup>報<sup>ほう</sup>より<sup>より</sup>心<sup>こころ</sup>は<sup>は</sup>ね<sup>ね</sup>が<sup>が</sup>ら<sup>ら</sup>車<sup>くるま</sup>に<sup>に</sup>存<sup>ぞん</sup>在<sup>ざい</sup>候<sup>まほし</sup>ま<sup>ま</sup>  
軍<sup>ぐん</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>持<sup>もち</sup>く<sup>く</sup>難<sup>なん</sup>指<sup>さし</sup>物<sup>もの</sup>も<sup>も</sup>法<sup>ほう</sup>ら<sup>ら</sup>



よし得る所を執るに事及ぶと  
難く言ふと出さるる先刻より言提  
山子南りて糧糧之度より  
重むる度乃の儀(さもさき)ぐ  
お見(又朽木)秋之(服板)亦乃陣  
中(度)軍使の性素信る振子  
ありと中(れ)を徹(心)服(通)致(好)  
ころ(音)隆(あ)き(ば)持(る)魔(と)下

よの星(ち)と(ら)ぬ(き)て(今)の(ま)や  
是(迄)之(ま)き(秀)秋(送)ん(と)く  
裏(切)き(ん)と(す)ら(の)之(朽)木(秋)月  
服(板)の(陣)と(毛)塔(と)列(を)平(お)  
極(ち)う(の)の(終)と(さ)入(放)軍(は)と  
し(と)思(ふ)り(今)も(秀)秋(が)列(ん)  
よ(て)了(死)一(生)と(ぬ)ら(我)を(此)所(を)  
生(害)と(さ)る(り)は(惜)身(れ)急



て那<sup>な</sup>らるべきと名<sup>な</sup>ひしれ<sup>れ</sup>る金吾  
を刺<sup>さ</sup>殺<sup>ころ</sup>さんとせしに金<sup>かね</sup>双<sup>ふた</sup>の倭<sup>わ</sup>奸<sup>かん</sup>  
の口<sup>くち</sup>より逃<sup>に</sup>げしより人の生<sup>せい</sup>霊<sup>れい</sup>魂<sup>こん</sup>  
魄<sup>はく</sup>あるものありは恨<sup>うら</sup>まひ永<sup>なが</sup>死<sup>し</sup>  
後<sup>ご</sup>進<sup>しん</sup>を逃<sup>に</sup>げしより我<sup>われ</sup>生<sup>せい</sup>霊<sup>れい</sup>魂<sup>こん</sup>  
此<sup>こゝ</sup>首<sup>くび</sup>被<sup>ひ</sup>殺<sup>ころ</sup>の事<sup>こと</sup>一<sup>いつ</sup>後<sup>ご</sup>さる<sup>る</sup>送<sup>おくり</sup>統<sup>と</sup>の事<sup>こと</sup>  
也<sup>なり</sup>進<sup>しん</sup>六<sup>む</sup>條<sup>じょう</sup>河<sup>か</sup>系<sup>けい</sup>一<sup>いつ</sup>河<sup>か</sup>系<sup>けい</sup>一<sup>いつ</sup>河<sup>か</sup>系<sup>けい</sup>  
は百<sup>ひゃく</sup>人の比<sup>ひ</sup>判<sup>はん</sup>を交<sup>ま</sup>る<sup>る</sup>は惜<sup>うれ</sup>ま<sup>ま</sup>交<sup>ま</sup>

あり汝<sup>なんぢ</sup>ち入<sup>い</sup>助<sup>すけ</sup>心<sup>こゝろ</sup>被<sup>ひ</sup>殺<sup>ころ</sup>して我<sup>われ</sup>首<sup>くび</sup>を  
深<sup>ふか</sup>く隠<sup>かく</sup>しよと之<sup>これ</sup>お捕<sup>と</sup>る<sup>る</sup>この  
後<sup>ご</sup>を遠<sup>とほ</sup>くする夏<sup>なつ</sup>句<sup>く</sup>れ嫡<sup>ちやく</sup>子<sup>し</sup>大<sup>だい</sup>学<sup>がく</sup>院<sup>いん</sup>  
次<sup>つぎ</sup>冨<sup>とみ</sup>木<sup>き</sup>下<sup>した</sup>山<sup>やま</sup>撤<sup>たく</sup>ち<sup>ち</sup>石<sup>いし</sup>系<sup>けい</sup>時<sup>とき</sup>のあ  
る<sup>あり</sup>ふあり倭<sup>わ</sup>奸<sup>かん</sup>我<sup>われ</sup>手<sup>て</sup>此<sup>こゝ</sup>会<sup>あ</sup>ひ<sup>あ</sup>ひ  
は小<sup>こ</sup>勢<sup>せい</sup>也<sup>なり</sup>去<sup>こゝろ</sup>那<sup>な</sup>が<sup>が</sup>一<sup>いつ</sup>宮<sup>みや</sup>東<sup>とう</sup>の<sup>の</sup>人<sup>ひと</sup>  
よりさして送<sup>おくり</sup>恨<sup>うら</sup>まひ<sup>ひ</sup>を<sup>を</sup>さ<sup>さ</sup>く  
今<sup>いま</sup>吾<sup>われ</sup>秀<sup>ひで</sup>秋<sup>あき</sup>并<sup>なら</sup>び<sup>び</sup>小<sup>こ</sup>朽<sup>く</sup>木<sup>き</sup>秋<sup>あき</sup>月<sup>つき</sup>照<sup>あ</sup>



坂おりののみく〜深く〜  
 たり〜  
 又総り押分け志丸り是怪  
 成立く待接〜り  
 池清

室戸系軍記二編巻の亦八段  
 池清

羅 譚 書  
 倭 軍 書  
 唐 軍 書  
 隨 筆 物  
 國々名所  
 近世戦争書類  
 右々外數品は座山宮中蔵に  
 書物價目所  
 繪 本  
 書 本  
 滑稽物  
 曲馬琴之作  
 其外諸先生作  
 軍書  
 敵討  
 諸家騷動  
 御捌物  
 東京中込細所  
 誠光堂 池田屋法吉



